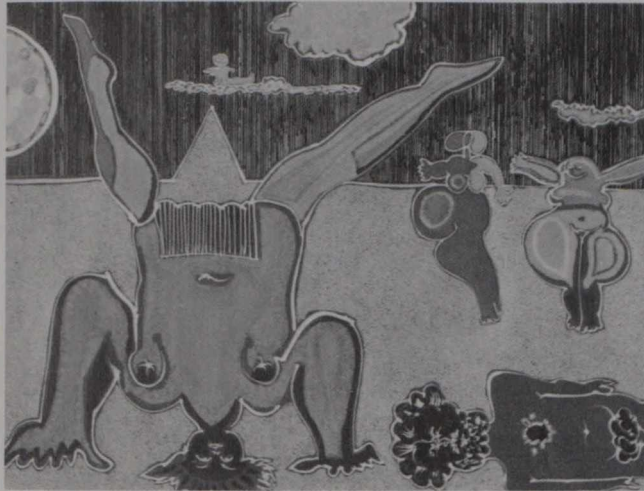


多才な画家

ハロルド・タウン

かつてのハロルド・タウンはトロントの気の小さな若者の一人だった。

「美術学校に入る前の晩、ぼくはローナ・グリルにいた。そう、テカテカの髪に白いソックス、あの頃のなつかしい服を身につけて、顔付きはというと、バンドマン連中のまねをしてさも世の中に退屈しきったような表情をとりつづっていた。で、ある年上の女（といってもせいぜい二十二歳といったところだったろう）をひっかけることができたわけだ。彼女を家に送って行ったら、みんなもう



タウン作「世界パリエーションNo.75」

Yvan Boulerice, Canada Council Art Bank Collection

寝ているから、お入りにならない、と彼女がいう。内心うまいと思った思いながら入りかけて、突然足がとまった。首の飾りチェーンに締め上げられるように息が苦しくなると、思いがけずぼくはしゃべった。ぼく、行かなくちゃ。あした学校が始まるんです。朝早いです。」

明けておめでとうござ
います。ご健康を祝し、カナ
ダと日本の関係がさらに深
まることを祈念します。

カナダ大使館一同

のちになって、時間を守ることはマジメ人間の美点であることをハロルドは知った。彼のような人間は自分の時計の音にあわせて歩調をとる以外ないのだ。

タウンは一九五〇年代にトロント近辺で活躍した抽象表現派の画家たちのグループ「ペインターズ・イレブン」の創始者の一人で、彼の作品はこれまで各地の国際的展示会で紹介されてきた。多才かつ独創的な彼は、図画、油絵、版画、コラージュ、彫刻と各方面で才能を發揮、一九五〇年代には版画を通じて流麗な図案家であると共にグラフィック・アーティストとしてすばらしいデザイン感覚をもっていることを示した。作品としては、アクション・ペインティングの手法を使った巨大な抽象壁画（一九五八年）、黒、銀、白の三色による連作「Tyranny of

the Corner」、あるいは色調豊かな名品「The Great Divide」などがよく知られている。著書も多く、カナダの芸術界の大御所である。

日系の建築家

レイモンド・モリヤマ

モリヤマ（森山）氏については、森研三、高見弘人共著「カナダの萬歳物語」が紹介しているから、それを引用させてもらうことにしよう。

「カナダには世界的に名の知られた建築設計家が二人いる。一人は、一九七〇年の大阪万博にカナダ・パビリオンの設計で一等に入選したバンクーバー在住のエリックソン氏。もう一人はトロント在住で、日系人二世のレイモンド森山氏である。

バンクーバー生まれ

れの森山氏は、トロント大学建築科を優秀な成績で卒業した。まず腕試しに設計したのが、日系人の総力で資金を集めて完成させたトロント市の「日系カナダ人文化会館」で、その見事なデザインによって一躍クローズアップされた。

その後、オンタリオ州政府が、カナダ



建国百年記念で計画した「科学センター」を設計した。建築費約百億円。ケタはずれの子算が超過したため閣着が起きたが、野心的で、しかも、地形を巧みに利用した「科学センター」は、米加両国にない珍しい構造として、このコンクリート建築を見事に完成させた。

いまやレイモンド・森山氏は、トップクラスの建築家として、彼の設計・監督を依頼する事項が次々と舞い込んできている。

ナイアガラ・フォールズ町近くのセント・キャソリンズにあるブロック大学の「大講堂」を設計、トロント市に近いスカボロの「市庁舎」も設計し、さらにオンタリオ州ロンドン市の図書館も設計した。そしてカナダ最大の都市トロント市

の中央図書館も設計、見事に完成させるという人気建築家となっている。

このほか、ヨーク大学理学部の校舎、グローバル・テレビ局など斬新なセンスの建物は同氏独得の設計によるものである。」